



Title	巻頭言
Author(s)	木村, 敏明; Boret, Penmellen Sébastien; 井川, 裕 覚
Citation	宗教と社会貢献. 2025, 15(2), p. 21-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102816
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

東日本大震災・能登半島地震の復興と支援

—宗教者と研究者の対話—

巻頭言

第一部 宗教者災害支援連絡会・宗教者からの報告

報告1

宗教者の災害支援—東日本大震災から能登半島地震へ—
(島薗 進)

報告2

僧侶の被災地支援—令和6年能登半島地震災害支援—
(高柳 龍哉)

報告3

被災地を棄てる日本での宗教者が目指すべき〈復興〉／〈防災〉を自問する
—奥能登ボランティア—
(佐々木 美和)

第二部 災害人文学領域からの報告

報告4

地域文化としての方言と被災地の復興
(中西 太郎)

報告5

当事者と〈共に〉研究する?—水俣・仙台での試み—
(小松原 織香)

本特集は、2025年1月24日に東北大学で行われたシンポジウム（2024年度第4回災害人文学領域研究会）「東日本大震災・能登半島地震の復興と支援—宗教者と研究者の対話—」（主催：東北大学災害科学コアリサーチクラスター災害人文学領域、共催：宗教者災害支援連絡会）の報告内容をまとめたものである。

現在の東北大学災害科学コアリサーチクラスターでは、災害理学、実践防

災学、災害医学、災害人文学など多岐にわたる領域を設置し、災害に対する多角的な研究方法を追求している。クラスターの母体である東北大学災害科学国際研究所 (IRIDeS) は、2011 年の東日本大震災を契機に設立された。初代所長の歴史学者・平川新教授は、歴史資料の保全活動を通じて災害と人文学の接点を模索し、文理融合的研究の確立に尽力された。そして、2016 年に東北大学が文部科学省により指定国立大学に選ばれた際に、災害科学研究拠点（現在の災害科学コアリサーチクラスター）が設置された。その中新たに設けられた研究領域が災害人文学であった。

災害人文学では、研究者と復興支援者、そして被災者の立場が相互に入れ替わることに重きが置かれる。すなわち、「研究者／調査対象者」および「支援者／被支援者」という境界を越えて、災害に関わる人々が共に学び、共に復興に貢献することが基本的な理念となる。これは、被災地域に生きる人々の視点から災害を捉え直し、復興における生活文化の意義を考えることである。

本シンポジウムでは、被災現場で復興支援に携わる宗教関係者の報告をうかがい、災害人文学の研究成果が実際の支援活動にどのように役立つかを議論することを目指して開催された。本特集を通して、災害復興に向けたさらなる一步を踏み出せることを心より願っている。最後に、遠方からお越しいただいた参加者、そして本特集に寄稿いただいた先生方に感謝を申し上げたい。

特集担当：木村敏明（東北大学教授）、BORET Penmellen Sébastien（東北大学准教授）、井川裕覚（淑徳大学助教）